

2. 基調講演要旨

「防災の主役は若い力」

重川 希志依 富士常葉大学環境防災研究科教授

- ・ 普段防災の仕事をしているが、自分が地震に遭うという経験は、人の話を見聞きするのでは全く違う。実際の被災者の気持ちというのはなかなか分からないと改めて痛感した。昨年8月11日の駿河湾地震について、揺れがどこまで大きくなるか分からない、何秒ぐらい続くのかが分からなくて自分は怖かった。
- ・ 地震によってどんな怪我をしたのか、静岡県調査を元に統計化。地震が起きると怪我の原因になるのは、落下物、転倒、ガラス。8月の駿河湾地震でもこの3つが怪我の主原因だった。怪我をすると、もうその場で要援護者になる。どの怪我也、慌てて転んだ、ぶつけた、というような「慌ててしまった」というところが1番大きな原因になっている。
- ・ 焼津市が市民約2,000人に行ったアンケートの結果。「地震直後津波の危険を感じたか」。半分の1000人程が危険を感じたと答えたが、避難をしたのは40人弱。ほとんど人は危険を感じたけれども何もしなかった。40人弱は実際に逃げるといふ行動が出来る人っていうのは何が違うのか。
- ・ 同じ焼津市のアンケート結果から、地震を経験して大事だと思った地域での助け合いは、実際に災害が起きて震え上がっている時、まず必要なのは声を掛け合うこと。それから地域の中で自力で安全を確保出来ない人への気配り。この2つが非常に重要ということがわかった。
- ・ 私たちはいろんな災害の情報についてマスコミを通じて見ているが、災害対応のプロセス、シナリオが理解出来ていない。「分からないことが一番不安で苦しかった」と阪神大震災の被災者の方も応えている。災害により被害を受ける前の段階で、災害対応のプロセスやシナリオを共有することがとても重要である。
- ・ 新潟県中越地震で震度7を記録した、新潟県小千谷市の高校生に「自分への表彰状」というタイトルで作文を書いてもらった。作文に書かれていたことを「命を守る」、「生き残った人たちの暮らしを維持していく」、そして「復興」という3つのハードルに整理して紹介。